国語

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「（　1　）」
伸びをしながら寝室から出てきた夫が、どこかで見たことのある服を着ている。
「（　2　）」
「だって、浴室が寒いんだもん」
「（　3　）」
「（　4　）」
大学への通勤用に買ったカーディガンには、夫の(一)ネゾウで、ぱっちり、(二)襞がついている。ぐぬぬ。
「あなた用に、パジャマにはおれる服、買っておいたでしょ」
「（　5　）」
うーん、やはりそうか。夫は私と体格がほぼ同じで、男性にしてはかなり細身だ。だから、メンズのSでも少し大きい。「なかなか合う服がなくて、大変だねえ」というと「社会の荒波にもまれて、痩せおとろえたのさ」などと、寝ぐせをピンと立てて気取っている。
私の体は、女性用のMサイズの規格にぴったり合うので、売り切れない限り、欲しい服のサイズがないという事態には(三)オイデならない。S、M、L……世間の平均的な体格に合わせた服も、社会の用意したひとつの規格だ。
私はまた(A)マジョリティーに属しているので不便はないが、夫は(B)マイノリティーとして、補丈を直す追加料金を支払ったり、勝手に妻の服をはおって文句をいわれたりしている。
社会のシステムは、どうしても、多数派に合わせて作られがちだ。用意された規格にはまらないオリジンをもつ人は、多かれ少なかれ、不便を抱えて暮らしている。
性別もまた、社会に用意された規格のひとつ。男と女というたった2つの枠に、多種多様な人間を押し込めるから、息苦しい思いをする人も出てくるのだ。枠のない、少数派も多数派もない、みんながただの人間でいられる場所はないのだろうか。
戸籍上は(C)□□でも、心は(D)□□(四)トランスジェンダーの女性の入学を認めると、お茶の水女子大学が発表した。もともと学問の場をもたない女性に教育の機会を与えた女子大は、本質的にマイノリティーの学びを保証する場所だ。だから今回の決断は、社会の枠の外に置かれた存在を受け入れてきた女子大として、当然あるべき流れだろう。
私もこの大学で学んだ一人だが、学内では女らしさや性別を意識することなく、人間として私らしくいられた。のびのびと研究に集中できた。
女子大やTシャツめくり　(五)臍眉ぐ
そもそも考えてみれば、私の選んだ「(六)俳句は、ジェンダーフリーな文学だ。句会では、持ち寄った互いの句を無記名で一覧にし、作者が女か男か、社長か(七)ハケン社員か、ベテランか初心者か、すべての情報は、十七音の前に意味をなさない。完全実力主義の世界だ。高校時代に俳句と出合った私にとって、句会は、女子でも高校生でもない、ただの私でいられる場所だった。
そして、句会の形式のみならず、俳句は本質的に平等な詩型である。たとえば道で出会ったヒトリとして招待されたのは、(A)□□『鬱子渡り鳥』が英訳出版されたからだ。年男の(二)戌年生まれの僕は、しっぽを振りふり、英語世界からの承認を求めているだけなのでは？　わんわん！
いまや文学においても共通言語は英語だと言っても(四)カゴンではない。どの国でも翻訳出版のなかで英語からの翻訳が占める割合が最大であるにちがいない。
僕は現代フランス文学の研究者でもある。でも、気づくと現代の英米文学作品を読むことのほうが多くなっている。他の国々の文学作品に関しても仏訳よりも英訳で読むことが増えてきた。
アメリカで出版総数に翻訳書が占める割合は3％に満たないと聞いた。なのに、世界文学の傑作、怪作、良書が英語に翻訳されていると感じてしまうのは、文学作品の国際的な流通・受容に決定的な権力を持つ(五)アメリカに対する憧れと劣等感のせいなのだろうか。
いや、それだけではないはずだ。ペイエリア・ブックフェスの前に、シアトル、ヒューストン、グラス、ポートランドの4都市の独立系の書店を訪れた体験が僕にそう反論させる。
「(C)□□□での発信はたしかに重要。でも実際にあなたの本を応援してくれる書店を訪れ、書店員たちやお客さんと交流することはもっと大事」アメリカの版元の担当編集者のヴェロニカは、自身がオンラインの批評誌で活躍する人だが、そう強調した。
その彼女と一緒に、1月にはメンフィスで開催された全米の独立系書店のバイヤーたちが集まる集会に参加した。今回、自著について話をする機会を与えてもらったテキサスの2書店の人たちとは、そこで出会った。
シアトルの老舗エリオット・ベイ書店で、トークの相手役を務めてくれた名物書店員リックさんは、僕の(六)ケイアイするフランス人作家の英訳を店手に現れた。談笑していると、僕が2月末に訪問したインドのニューデリーにあるフェミニスト系出版社と昔から交流があることがわかる。
グラスのインターバング書店では、イベントのあとの夕食の席で、著名な文学賞の(七)シンサ員でもある共同経営者のロリさんが、「20代の書店員たちの意見にじっくり耳を傾ける様子が好ましかった。全員がまったく対等な立場で文学作品について論じあう。『さすがアメリカ、民主的！』と言うと、『でもその結果がトランプよ』と、ロリさんは眉をひそめて。ここはどこ？　本棚を見ると、外国文学の翻訳書ばかりだ。日本の現代作家の作品も熱烈な推薦文つきで飾られている。月1回の書店主催の読書会では、小川洋子の『ホテル・アイリス』を読んだばかりだという。
プラゾス書店では、おそらく棚の3割強が翻訳書である。この書店にいると、政治や経済の(八)リヨウイキで、おのれの基準を世界全体に押しつけてくるようにしか感じられないあの超大国が、諸外国の文学から積極的に学ぼうとしている謙虚な国に見えてくる。
いや、実際に(B)そうなのかもしれない。プラゾスの若い書店員のチューさんの言葉が印象に残っている。
僕を空港まで車で送ってくれながら、彼女は言った。ベトナム系移民2世の自分は、外国文学を介して異なる思考や感情に触れることで、自分とは何者かを考えてきたんだと思う。
となりの芝は青く見える。とはいえ、文字通り世界中からやって来た移民が作り上げる社会の多様性や矛盾こそが、この国の書物文化をダイナミックで魅惑的なものにしている。それが書店員さんたちとの出会いを通じて僕が得た偽らざる実感である。
自己や他者、そして世界とよりよく向き合うために、書物を、とりわけ異国で書かれた作品を読むことを必要とする人々が確実に存在する。既知に安住することなく、異なるものへたえず好奇心を向ける読者たちが、本への愛と情熱を共有する場所としての書店。そこには、国家間の力関係からは自由な、想像力と共感を紐帯（ちゅうたい）に人々が平等に交流しあう〈文芸共和国〉が開かれている。

＊紐帯……ひもとおびの意。二つのものを堅く結びつけるもの。

（小野　正嗣『書店という文芸共和国』より）

問一　傍線部分（一）～（八）のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

問二　空欄（A）と（C）には、次の意味の言葉が入る。その言葉を（A）は二字、（C）は三字で書きなさい。
（A）自分の書いた本を謙遜していう言葉
（C）スマートフォン・携帯電話・パソコンなどでの交流サイト・サービスをいう英語の文字

問三　傍線部分（B）について、このことを筆者自身の具体的行動としてユーモアを込めて表現している部分を二十四字で抜き出しなさい。

問四　傍線部分（D）について、指示内容を二十四字で抜き出しなさい。

問五　この文章を要約しなさい。
（句読点も含めて二百字以内とする）

三　次の漢字の読みをひらがなで書きなさい。
1　夏至　　2　匿名

四　次の傍線部分のカタカナを漢字に直しなさい。
1　距離をハカる。
2　職業のテキセイを調べる。

五　次の語に対立する意味の熟語を書きなさい。
1　返信　　2　被害

六　下の意味を参考にして、漢字を補って四字熟語を完成しなさい。
1　□□霧中（深い霧の中で方角がわからないこと）
2　内憂□□（内にも外にも心配ごとがあること）

七　次の傍線部分の敬語表現が適切であれば○を、適切でなければ適切な表現を書きなさい。
1　先生が拝見した作品は、どの生徒のものでしたか。
2　先日、先生からお借りした本は、とても参考になりました。

キガエルやヒマワリにとって、私がスカートを穿（は）いているかどうかなんて関係ない。彼らを詠まんと向き合うとき、私は人間であることすら忘れ、ともに涼しい風に吹かれる。女だって男だって、ミミズだってオケラだってアメンボだって……俳句の前ではみんなみんな、ひとしく今を生きる命なのだ。

（神野　紗希　『俳句はジェンダーフリー』より）

問一　傍線部分（一）～（五）のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

問二　空欄（1）～（5）について、会話が成り立つように適切な言葉を次のア～オから選び、記号で答えなさい。
ア　あ、また、私のカーディガンを勝手に着て！
イ　え？　ユニクロかと思った
ウ　やっぱ、神が長いんだよね
エ　もう、それ、高いんだよ。麻の素材だから、そんなにあったかくないし
オ　おはよう、ふわあ。

問三　傍線部分（A）と（B）について、それぞれの意味を表す言葉を抜き出しなさい。

問四　空欄（C）と（D）について、ふさわしい言葉を書きなさい。

問五　傍線部分（E）について、大学のこのような決定について、筆者はどのように考えているか。端的に書きなさい。
（句読点も含めて四十字以内とする）

問六　傍線部分（F）について、筆者がこのように考える根拠を二点書きなさい。
（句読点も含めて六十字以内とする）

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「なぜアメリカ現代文学が世界で読まれるのか？　アメリカが超大国だからでしょう」
劇場を埋め尽くす聴衆の前で、そう喝破したのは、ベトナム系アメリカ人作家のヴィエト・タン・ウェンだった。
4月末、僕はアメリカの西海岸パークレーで開催されたベイエリア・ブックフェスティバルにいて、ウェンと日系作家カレン・テイ・ヤマシタの公開対談を聞いていた。
ウェンは、長編小説『シンパサイザー』でアメリカ最高の文学賞ピュリッツアー賞に輝いた後英。世界中で日々素晴らしい作品が書かれている。にもかかわらず一部の国や言語の文学だけが重視されるのはなぜか。それは、作品の評価・受容には、「質」以外の要素、ある国が現代世界において持つ権力や支配や影響力もまた大きく作用しているからだ。
ダンディで、知性とユーモア(二)溢れる爽やかな語り口で聴衆を魅了するウェンの言葉に納得しつつも、複雑な気持ちになっていた。
というのも、多彩なイベントが(三)マンサイで中身の濃いこの文学祭に僕ごときがスピーカーの